杉村和彦・鶴田格・末原達郎編

『アフリカから農を問い直す――自然社会の農学を求めて――』

京都大学学術出版会　2023年　x + 466ページ

生駒忠大（いこまただひろ）

はじめに

近代化が最も「遅れている」地域とされてきたサブサハラアフリカ（以下，アフリカ）の農村社会と，そこで営まれている農業がもっている諸特性を，農業の産業的な発展を是としてきた文明史観と相対化しながらあぶりだそうと試みたのが，本書である。視点を私たちの社会に移せば，その作業は，現代が経験している気候変動や生物多様性の縮減といった，未曾有の複合的危機に対する突破口の手がかりとなると，編者らはみている。要するに本書は，人間と農の関係に向き合ってきた読者ならばきっと一度は考えたことがあるであろう，「人間にとって農業の進歩とはなにか」という根源的な問いに対して，アフリカ現地での調査から考えるものであり，その内容は示唆に富んでいて刺激的である。

本書の論旨については，すでに同分野の研究者が簡にして要を得た書評を著しているのでぜひ参照されたい［黒田 2023］。ところで本書が描くアフリカ社会の特性は，「緑の革命」に「成功」したとするアジアという比較対象をおくことでより鮮明にしようとしている。評者はこれまでアジアを調査対象としてきており，国際協力の実務の面からアフリカの農業と向き合うようになったものの，まだ日は浅い。そこでこの書評では，管見ではあるが，アジアの視座から，とくに議論の要諦をなすと読める農法の特異性や，編者らが「アグラリアン社会」から希望として引き出そうとする有機農業（自然農法），そして開発の実務者という三つの観点からコメントを付したい。本書の冒頭は国民総幸福量（GNH）に触れる一文に始まるが，以下では奇しくも評者がそのGNHを生んだ国家であるブータンでおこなった調査と，また日本で取り組んでいる有機農業実践研究の経験をおもな材料とする。

Ⅰ　本書の構成

まず本書の構成を整理してみる。本書は，農学や生態人類学，地域研究の研究者ら10名による論文集であり，計13章からなる4部構成となっている。第1部「アフリカ農業から何を学ぶか」では，現代社会が抱えている農に関する環境的，社会的問題を議論の俎上にあげる。そしてそれに対して，G.ハイデンの「捕捉されない農民（uncaptured peasantry）」考や，上山春平の農業発展論を援用しながら，アフリカがもつこうした問題に対する潜在的な可能性ともいえる諸特性を捉える視角を読者と共有する。その上で編者らは，伊谷学派が残した生態人類学的研究を紐解くことをとおして，アフリカの農村社会の特性は，アフリカが「アグラリアン社会」の段階をまだ経験していない「自然社会」であるがゆえであるとの仮説を立て，本論に入っていく。続く第2部「アフリカ農業・農村の特性把握」では，アフリカ農業・農村の自然社会的な特徴を以下の点にみている。それはすなわち，「流動性と分散性（開放性）」，「生業の複合性と多様性・非画一性」，「農法や作物の多様性・非画一性（焼畑と混作）」，「分与の経済と『消費の共同体』」，「（非恒久的な）富の蓄積と家族の再生産」である。編者らは各々の章を分担し，丹念なフィールドワークをもとにこれらの特性を鮮やかに描写しており，アフリカに広く関心がある読者にとっては読み物としてもおもしろい。第3部「近代農学とアフリカの農」では，アフリカに当てていた焦点を欧州や日本の農業文明史や発展観にシフトし，それを引き合いにして国家農学と開発援助のあり方を批判的に検討する。これによって，編者らが第2部で論じたアフリカに特有とする非固定的な土地認識や，「緑の革命」に馴染まなかった小農の生業をより明快に浮き上がらせることに成功している。殊に第10章の池上甲一氏による開発援助の「失敗」論考は，本書のおもな読者層とも予想される国際協力にたずさわる実務家に対して，「援

ⓒ IDE-JETRO 2024
https://doi.org/10.24765/ajiakeizai.65.4_99

助」が孕む暴力性を改めて喚起させ熟考を迫る主張である。最後に第4部「自然社会の農学」では，アフリカ農村における「生産」に対する「消費」から生まれるイノベーションの固有性を指摘する。最後は，近代農学のイデオロギーをおもにV. シヴァの議論に依拠して批判しながら，改めてアフリカの農の現状に未来を探る視点を提示し，本書を総括している。

各章に配されている計10のコラムでは，I. イリイチ『シャドウ・ワーク――生活のあり方を問う――』やJ. スコット『モーラル・エコノミー――東南アジアの農民叛乱と生存維持――』，V. シヴァ『生物多様性の危機――精神のモノカルチャー――』などのいずれも国家権力が主導するかたちでの農業の近代化に対して，農民の足元の論理から批判的考察をおこなってきた研究者や活動家の思想および研究が紹介されており，本書の理論的な組み立てを歴史の潮流と照らし合わせながら理解することを助けてくれる。

Ⅱ　「アフリカ農業・農村の特徴」はアフリカに特有か

評者は，アフリカの農村社会にみられる自然社会的な特性は焼畑（混作）や牧畜の実践の様相から見出すことができる，というのが本書の重要な主張であると読み取った。しかしこの点に関しては，アジアをフィールドとする研究者らから異論が投げかけられるだろう。

たとえば，評者の一調査地である東ブータンでは，まだ焼畑が生業として残っている地域があったので紹介しよう。インドに近い熱帯地域では，焼畑がいまも実践されているエリアがある。それは本書で繰り返し言及される焼畑の性質とよく似ていた。集落周辺の二次林にパッチ状に広がっていた焼畑耕作地で，住民は換金作物であるトウガラシを主作として約15種類の蔬菜や雑穀を栽培していた。これは編者らが強調する混作である。焼畑集落での悉皆調査によると，住民はたいてい6年以上の休閑期間をおくという。一方でかれらは居住エリアの周辺でも常畑を利用しており，そちらでは年間を通じてメイズ，そして冬季には蔬菜の栽培もおこなっていた。これは，作物の多様性や非画一性，また耕作の移動性が高いという，本書でいうところの「自然社会」的な実践とみてよいのではないか。

しかし，本書と比べて興味深いのは，当該地域での焼畑は，30年ほど前を境にアワやシコクビエ等の雑穀中心からトウガラシやカブ等の蔬菜中心へ作目を変えている点である。つまり，サブシステンスの農法を維持しながらも普及する貨幣経済化に適応していた。事実，調査時，かれらの焼畑は，常畑に比べてはるかに重要な現金収入源に位置していたのである。この変遷に関する詳細な調査は未遂行であるが，これは本書第12章で杉村和彦氏が「市場化を前提とする緑の革命に抗する仕組み」（191ページ）と説明するコンゴ盆地に住むクム人の焼畑（混作）とは異なり，よりしなやかな弾力性をもっているものと思われる。

さらにブータンの農村は，農牧結合型の多生業を基盤とする社会が形成されていることでも知られている。標高約2000メートルにある調査対象集落は，斜面上に切り開かれた森林のなかに分散的に集落が点在していた。そこでは，系譜上近しい親族は，集落をまたいで生活圏を変える。市場経済が入ってきたごく最近までは，チベットやアッサムを含む対外貿易が重要な生業であって，山間で牛を放牧しながら移動する牧畜民的な性格が強かった。現在の牛の数は世帯当たり10頭にも満たなくなったが，それでも実践されている日帰り放牧では，季節に応じて林間や水田地を移動する。住民は，落葉採集林から集めた落葉を牛の寝床に敷き，厩肥をつくる。このように依然として牛は糞畜・用畜として欠かせない存在であり続けている。

この牧畜は，作物生産に必要な物質循環と強固に結びついているが，農業に従属するものではない。それは，かれらが給餌や放牧の作業を中心にして日々の仕事を組み立てているところからもみてとれた。すでに焼畑をやめた農民の田畑は，一見常畑のようであるが，近年は獣害が増加しているため逆に耕作地の変更や移動が増している。このように，かれらの生業のなかには，牧と農の実践が混じり合うことで，高い流動性・移動性がみてとれた。

ところで，本書が農業の環境保全的な潜在力を探るのであれば，アフリカだけでなくこうしたアジアの農畜循環や混作も対象に含めるべきだろう。今となっては「南北」世界で注目されている有機農業のバイ

ブル『農業聖典』（原題 *An Agricultural Testament*, 1940年刊行）は，ハワードによっておもにインドと中国，そして日本の技術を参考に体系化されたものである。アジアの農業は，湿潤な気候のもとで山海の豊富な天然資源の循環を促進することで複雑な生態系との共存が可能となり，高い人口密度を維持することができるようになったという事実がある。

紙幅の都合上詳述はできないが，第7章で杉山祐子氏が活写したザンビアのベンバにみられるシコクビエ酒による「平準化機構」と似た機能を，ブータンにおける蒸留酒にも見出すことができる。とくにブータン東部では，おもに女性が製造するメイズで作る蒸留酒が，かれらの農作業や寺にかかる共同労働等の社会的なイベントに欠かせないだけでなく，信仰にとっても重要であった。酒を媒介とした社会の平準化は，まだアフリカ以外の多くの地域でもみられるのではないだろうか。

アジアでの焼畑と混作をめぐる研究は，本書で何度か引用されるシヴァのほかにも相当の蓄積があり，またアジアには既述のように牧畜社会も広がっている。したがって，現代の農業文明史観に対する問いかけをするのであれば，アフリカだけでなく世界各地に残る「自然社会」を検討範囲に入れ，生態環境や歴史的な地域的差異を丁寧に明確にし，変容の過程を体系化する作業が必要ではないだろうか。それによって，本書が掲げる冒頭の問いに対する答えにより近づけるはずである。

Ⅲ　「アグラリアン社会」でもがく一般農家

アフリカの農から「アグラリアン社会」の代表例として日本を振り返ってみたとき，本書では近代農業の限界を乗り越える希望として，自然農法の祖の代表格である福岡正信とその極めて特異的ともいえる農法に限定的に言及している。しかし，既刊の書評黒田［2023］が「ここをもう少し書いて欲しかった」と述べる思いに評者も同感である。

日本では1960年代から農業の近代化に抗する生き方を貫こうとする一般農家が多く生まれてきた。最近の新規就農をめざす若者には，有機農業を希望する者が増えているように，その動きは近年加速している。評者は，日本国内で四半世紀にわたり秋には山に入り落ち葉をかき集め，それを田畑の肥やしとして利用してきている専業有機農家を間近にみてきた。評者自身も，将来はアジアやアフリカで学んだ自然とともにある農業を日本に逆輸入して実践することは有益だろうと考えている。ところがこうした農の暮らしを志向する者は，必ずしも福岡や同時代を生きたリーダーである一樂照雄のようなカリスマ性をもっていないし，自然農の開拓者たちの生き方を追いかけているわけでもない。そうであっても，自身が理想とする自然環境に最大限依拠しようとする等身大の暮らしと市場や政策との折り合いをつけるためにもがいている。そして，農産物の生産や消費の関係者の間ではネットワークが拡大しており，最近は民間企業の参入もみられるようになった。本書では，このような市民の「農」をめざす動きに関して記載がほとんどないが，「アグラリアン社会」のなかで生まれる「脱アグラリアン社会化」の萌芽として光を当てる視点もあり得るのではなかろうか。

また，上述の「アグラリアン社会」内の市民の動向とは別の視点として，公的機関主導による環境保全型農業（環境再生型農業）の導入もある。評者が有機野菜栽培の普及に従事したフィリピンは，「緑の革命」を最も徹底したかたちで経験した国家のひとつであるが，2000年代以降の政策転換を背景に，いまとなっては農政の末端に位置する普及指導員は農民に有機農業を指導している。ここで取り組まれる農業普及は，生産第一主義を貫いた「緑の革命」とは一線を画す要素を明らかに含んでいる。他方で日本においては，農林水産省が2021年に発表した「みどりの食料システム戦略」がその典型的な例といえるだろう。

以上は限られた事例であるが，こうした「新興国」や「先進国」に広がっている「アグラリアン社会」における公的な動きを本書ではほとんど考察しないのはなぜだろうか。編者らは，政府主導による環境保全型農業の導入は生産性より市場性や商品化に重きをおいているだけであり，本質的には新自由主義をまとった農業近代化論の延長上にあるとみて省いたのであろうか。しかし現実問題として，農民にとっては依然として，市場経済の「生産の論理」を無視して暮らしを成立させることはできないという厳然たる状況が存在しているのも事実である。その点に対してはどう折衷策を考えたらよいのか。

おわりに

アフリカは急速な社会の変化を経験している最中である。国連が2022年に発表した世界人口予測によると，アフリカ地域の人口は，2022年の11億5000万人から2030年に14億人，2050年には20億9000万人に到達すると見込まれている［United Nations 2022］。サブシステンスに軸足をおく「自然社会」の農では，到底人口増を支えられない（そもそも支えることを志向していない）。将来的にも都市化に伴って農村住民の生計戦略は変化し，アジアが辿ったような「アグラリアン社会」化が農村部でも進んでいく可能性は高い。これは，泉直亮氏が第8章で報告している農牧の関係性の変化や，鶴田格氏が第11章で言及する移動耕作（焼畑）から定住的な休閑耕作への変化にもみられるように思われる。上述したブータンは，鎖国状態が解かれた後，社会の工業化を経験する前に情報化が進展したという意味では特異な国家であった［藤原 2020］。そして同国からオーストラリアやカナダへの若者流出は止まらず，農村は過疎化とともに劇的に変わろうとしている現象は，アフリカにとっても示唆的ではないだろうか。

本書は，上段で述べたような「アグラリアン・バイアス」ともいえる単線的な見方から抜け出す契機に研究者や実務家を誘い，農業の進歩だけでなく現代社会が抱える危機にどのように向き合うべきかという重い問いを投げかけている。「人新世」が叫ばれるこの時代，従前の開発援助や「緑の革命」が地球規模の気候危機や対象地域の文化・社会に与える影響に無自覚であってはならないことは間違いなく，変革が必要だ。かといって，その「成功」への方法はまだ誰にも描けていない。編者らが述べるように，「農業の近代化が，必ずしも農民を幸せにする（農民のニーズに合致する）」（439ページ）とは思わないが，果たしてその場合の「農民のニーズ」とは何なのだろうか。これを考えたとき私たちは，「非農民」としての独善的な視点に立っていないだろうかという自問がつきまとうのである。

本書がいうところの「自然社会」の農（学）の特性に可能性を見出すと同時に，「アグラリアン社会」を受け入れてきた私たちがどう次の食料生産システムや農村社会構造を構築（または解体）していくのかという議論は，科学の範疇の問題というよりは，むしろ政治に属する問題なのかもしれない。しかし本書ではそこを最終的な論点としてはいるものの，やはり活路は描けていない印象を受けた。少なくともそこを描くためには，「アグラリアン社会」との建設的な議論と共創の精神が重要となるのではないか。その点に関して，これからの編者らの研究をとおして考え続けたい。

文献リスト

〈日本語文献〉

黒田末壽 2023.「【書評】杉村和彦・鶴田 格・末原達郎編.『アフリカから農を問い直す――自然社会の農学を求めて――』」『アジア・アフリカ地域研究』23(1): 129-134.

藤原整 2020.『ブータンの情報社会――工業化なき情報化のゆくえ――』早稲田大学出版部.

〈ウェブサイト〉

United Nations 2022.“World Population Prospects 2022 Summary of Results.” https://www.un.org/development/desa/pd/sites/www.un.org.development.desa.pd/files/wpp2022_summary_of_results.pdf（2024年3月26日閲覧）

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（日本学術振興会特別研究員DC2），JICA経済開発部）